



岸本章弘氏

——テレワーク(リモートワーク)が拡大し、オフィスを縮小する動きもあります。オフィスはどのように変わるのでしょうか。
働く場所の多様な選択肢を活用したワークプレイス資源の再編が本格化し、分散連携するネットワーク型ワークプレイスへの移行がいつそう進む。

効率重視ですべてを一カ所に集約するセンター型オフィスから、ハブ/サテライト/ホームを柔軟に組み合わせ、オンラインネットワークでつなぐ、リアルとバーチャルのハイブリッド型のワークプレイス群へと再編されます。想定されるコープレーションやリース群へと再編される。

また、立地による賃料差を活用し、都心集約型から郊外を含む分散型に再編すれば、総面積が不変でも総賃料は下げられるだろう。リモートワークについては、個別事情の異なる住環境を考える試行と検証の場を提供、『リーダーシップ』(ビジネス構築と意思決定を支援、「コラボレーション」チームの協働環境を提供、「プロトタイプ」

の策ではない。低リスクで通勤できる郊外型サテライトや居住地近隣のシェアオフィスなども分散交換と共に支援)などが考えられる。

シリーズ

【“コロナ後”のオフィス】

①一極から多極分散型へ求められる“柔軟性”

新型コロナウイルスは、人間活動のあらゆる領域に重大な“変化”を迫った。オフィス/ワークプレイスはどのように変わるのか。“変化”的なようを複数の識者や実務家に聞く。まずは、オフィスに精通する岸本章弘氏(ワークスケープ・ラボ代表)の見方を2回に分けてお伝えする。

「インタラクション」(交流を促しつながりを育成)、「プランディング」(理念を表現し、文化を醸成)、「ラーニング」(知識・経験の交換と共有を支援)など

ハブとなるセンターオフィスの縮小については、テレワークの併用で同時に利用人数が減つても、ワーカー間の距離を広げる必要があれば、総面積が減らせるとは限らない。

ただし、オフィス内の用途別空間の構成や面積配分は変わらう。例えば、リモート化するデスクワークエリアが減り、協働のためのテーブルワークエリアが増える。

「他律」から「自律」へ

通路幅も広がるかもしない。

また、立地による賃料のためのプランディングやラーニングの促進は重要な課題だろう。暗黙知識を交換し、経験を共有する

結果を決めていた。

今後は、情報技術があらゆる局面で活用され、システムの性能が仕事の成

果によって処理される。仕事の重心は知識創造にシフトし、臨機応変なプロジェクト活動が増える。そのとき、組織はチームを育てるコミュニケーションを醸成するためのコラボレーションやプロトタイプ開発活動の支援、人を育てentrepriseのためのコラボレーションのための標準的業務フローに沿って構成された組織を効率的に配置する空間がオフィスである。

これまで、オフィスはその機能を効率的に配置する空間がオフィスである。しかし、オフィスはその機能を効率的に配置する空間がオフィスである。そのための標準的業務フローに沿って構成された組織を効率的に配置する空間がオフィスである。

このようにして、オフィスはその機能を効率的に配置する空間がオフィスである。そのための標準的業務フローに沿って構成された組織を効率的に配置する空間がオフィスである。

「情報処理工場」のシステムには書類と人手による処理、指示・報告による分業、標準化された業務フロー、業務フローを遂行する部隊、組織を効率的に配置する空間がある。人・書類・業務フローの各要素が連携して、情報処理工場が運営される。

「知識創造工場」のシステムにはデータとアルゴリズムによる処理、対話による協働、臨機応変なプロジェクトチームを育てるコミュニティ機能を効果的に設ける場所がある。人・書類・業務フローの各要素が連携して、知識創造工場が運営される。

「規定期間」が加速され、オフィス空間と移行していくだろう。これまで、オフィス空間は「情報処理工場」としてのシステムの一部を担つていていた。人もその一部として、書類と人手を使い、指示と報告に基づいて標準化された作業を分担した。そうした標準的業務フローに沿って構成された組織を効率的に配置する空間がオフィスである。

「デジタル化」が加速され、オフィス空間と移行していくだろう。これまで、オフィス空間は「情報処理工場」としてのシステムの一部を担つていていた。人もその一部として、書類と人手を使い、指示と報告に基づいて標準化された作業を分担した。そうした標準的業務

フローに沿って構成された組織を効率的に配置する空間がオフィスである。

シリーズ

【“コロナ後”のオフィス】

②シェアの流れにブレーキも
安全と生産性の両立模索へ

感染を防ぐために対人距離の確保が必要な“新型コロナ”は、人が集うオフィス／ワークプレイスに安全と生産性の両立を課す。しかし、あぶりだされてきた課題は、これまで指摘され、すでにあったものばかりではないか。前回に引き続き、岸本章弘氏（ワークスケープ・ラボ代表）に聞く。

的な人手ではなく、独立して多様な人だ。働く場にウェルネスに配慮した環境とサービスを提供することは、結果的にパフォーマンス向上の支援にもなる。人材確保のためにも不可欠だろう。

ただし、その対象となる環境は、中央のハブオフィスだけでなく、サテライトやホームオフィスまで含まれる。フルタイムのテレワークでなければ、住宅内の臨時オフィスは比較的シンプルな道具とインフラがあればいいが、身体のための環境性能がメインオフィスに劣つていいという理由は

日常生活シーン（家庭）に仕事と勉強のシーンが入り込んだ状態が制約的に実現されたことにより、多くの影響と課題が顕在化された。今後、ワーカーの見直しも必要だろう。

日々の施設を柔軟に用途転換できるような仕組みと制度の構築が必要だ。小規模サテライトオフィスとしてつくり替えることも可能だろう。都市の

が、手を抜いていいということではない。“新型コロナ”は収束しておらず、総括する時期でもありませんが、今回の事象を受けて気づいたことを考えたことはありますか。

日常生活シーン（家庭）に仕事と勉強のシーンが入り込んだ状態が制約的に実現されたことにより、多くの影響と課題が顕在化された。今後、ワーカーの見直しも必要だろう。

日々の施設を柔軟に用途転換できるような仕組みと制度の構築が必要だ。小規模サテライトオフィスとしてつくり替えることも可能だろう。都市の

が、手を抜いていいということではない。“新型コロナ”は収束しておらず、総括する時期でもありませんが、今回の事象を受けて気づいたことを考えたことはありますか。

日々の施設を柔軟に用途転換できるような仕組みと制度の構築が必要だ。小規模サテライトオフィスとしてつくり替えることも可能だろう。都市の

従来からの課題鮮明に

「コロナ」機に変革を

面、画面の見直しが進む

度については通常のオフィスほど要求されないと

はいえチェックすべき項目や視点は同様であり、実際に際しては住宅特有の課題も生まれる。臨時であることは、多くを必要としないことではある

たように、今後の仕事の

主役は「人」と「チーム」。

オフィスワーカーはシス

템の一部としての標準

——「ヴィズコロナ」から「コロナ後」に向けて、公衆衛生やヘルスケアの観点から、オフィス／ワークプレイスは何を変えていかなければならぬのでしょうか。

オンドマンド＆シェアへの流れにブレーキかかる可能性が考えられる。感染リスクを下げる専用／使い捨て／と、便利性と効率を高める「共用／都度選択利用」の適正な組み合わせを探す必要があるだろう。

継続的なモニタリング

を欠かさず、状況の変化に応じて「平時」プランから「緊急時」プランへ迅速に移行できる柔軟な仕組みづくりも重要。ジャストインタイム型サプライチェーンの見直し論と同様に、代替手段や余裕空間を備え、臨機応変に適応できるワークプレイス戦略への再編が求められる。

アヘの流れにブレーキかかる可能性が考えられる。感覚リスクを下げる専用／使い捨て／と、利便性と効率を高める「共用／都度選択利用」の適正な組み合わせを探す必要があるだろう。

度については通常のオフィスほど要求されないと

はいえチェックすべき項目や視点は同様であり、実際に際しては住宅特有の課題も生まれる。臨時であることは、多くを必要としないことではある

たように、今後の仕事の主役は「人」と「チーム」。オフィスワーカーはシステムの一部としての標準

が、手を抜いていいということではない。“新型コロナ”は収束しておらず、総括する時期でもありませんが、今回の事象を受けて気づいたことを考えたことはありますか。

日々の施設を柔軟に用途転換できるような仕組みと制度の構築が必要だ。小規模サテライトオフィスとしてつくり替えることも可能だろう。都市の

が、手を抜いていいということではない。“新型コロナ”は収束しておらず、総括する時期でもありませんが、今回の事象を受けて気づいたことを考えたことはありますか。

日々の施設を柔軟に用途転換できるような仕組みと制度の構築が必要だ。小規模サテライトオフィスとしてつくり替えることも可能だろう。都市の